

# 「ドイツ民主共和国と統一25年後の東ドイツ地域」(二〇一四年六月二三日、総合文化研究所)

講演 フランク・リースナー (千葉大学講師)

報告 山口裕之

二〇一四年はご承知の通り、一九八九年一月九日にベルリンの壁による東西ドイツの分断が事実上なくなってから二五年の節目にあたる。講演者のフランク・リースナー氏は、旧東ドイツに位置する現在のザクセン＝アンハルト州のゲンティーンという町の出身であり、幼少期から二〇代半ばまでの時期、「東ドイツ」のなかで生きてきた。リースナー氏は二〇一二年に東洋書店から『私は東ドイツに生まれた壁の向こうの日常生活』という本を出版しており、その本の中でも東ドイツがどのような国であったのかを、実際に東で暮らしていたドイツ人の視点から生き生きと描き出している。

この日の講演では、そういったリースナー氏自身の経験から、とりわけ東ドイツの教育支援の政策、労働者に対する雇用政策に焦点を当てつつ、日常的な視点から当時の東ドイツ像が示されていた。西側の視点からすれば、ともすれば東ドイツがいかに社会・経済・生活の面で立ち後れていたかという語り方が目に付くが、リースナー氏は、例えば学童保育や保育園の西と東の利用率に関する統計的資料を具体的に示すことによつて、東ドイツに対する単純な否定的イメージが必ずしも当てはまるわけではないことを指摘してゆく。それと同時に、社会主義国家の労働・社会政策においては、出世のために教会

から距離をとることが必要となるといった側面も例示されていた。

こういった自身の歴史的証言は、文化の理解のために欠くことができない。そのことを、この講演を通じてあらためて強く感じた。日本では(これは少し不思議な現象とさえ思えるのだが)とりわけこの十年ほどのあいだに、旧東ドイツについての本が次々に出版されている。それらのうちには、もちろん歴史的叙述のほか、「オスタルギー」(東〇とノスタルジーを掛け合わせた造語)を日本で再現してみせたような本も含まれている。そのようななかで東ドイツの、しかもごく日常的な市民の視点から、そして穏やかに距離と愛情をもちつつ東ドイツを描き出しているものはほとんどない。そのような立場からの講演をここで聴くことができたのは、参加者にとって非常に貴重な経験であった。